
気まぐれセカンドライフ

誰かの何か

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気まぐれセカンドライフ

【Zコード】

Z0239Z

【作者名】

誰かの何か

【あらすじ】

高校生の主人公である潤が突然異世界へ飛ばされて、ある時は二ート、またある時は宮殿の主になつたりと、セカンドライフを満喫していく。そんなお話。小説を書くのが初めてで、書き方・内容が拙いですが、どうぞよろしくお願いします。

潤「仕事したり鬭つたりしてリアルが充実してはいるが、リア充とは違うと思わざるを得ない今日この頃…チクショウ、目から汗がとまりねえ」

1 なんか、死にました（前書き）

はじめまして

作者の文才の都合上、亀更新となりますが、よろしくお願ひします

では、はじまりはじまつ

1 なんか、死にました

大地に邪なるもの埋め尽くす時、虚空より人舞い降りて、混沌と共に世界を破壊するであろう。 (『ワイスニルの予言』)

「ん、ここは?」

俺が今居る場所は真っ白い部屋。

いや、壁が見あたらないから真っ白い空間か?

まあ、どちらにせよここは俺の知らない場所には違いない。

・・・・・エエ～ッ!..

まあ、落ち着きましょうや俺。

まずは今までの行動をおさらいしよう。

学校から帰つて来る 夕飯を食べる 勉強、と思わせてリハベ 1
2時を過ぎたので寝る 目が覚める 今

ああ、もしかしなくともこれ夢じや…

「夢じやないよ」

五月蠅いな、人の思考に割り込むな。

・・・・・エエ～ッ!.. (本日2回目)

「な、なんだお前。つてかどこから出てきたー」

さつさと俺に声を掛けたであろうアニメに出てきそうな少女に向かって俺は言った。

「私?私は転生の女神だよ~?」

この娘は可哀想な子という認識でいいのかな。

「違うもん。転生の女神だもん!」

んな事言われたって…

「じゃ、女神らしい事見せてよ」

「いじょ～」

そう言つと女神（自称）は向やう小声でしゃべり始めた。
シ、シユールだ…

ボワッ

独り言を終えたらしい少女の手の平には炎の球が現れた。

「これが魔法。どう? これで私が可哀想な子じゃないって分かった
でしょ」

「こんなのは見せられたら

「お、おひ。本當らしいな
としか言えませんよ。はい。

「で、漸く本題何だけど、ビーハヤリあなたは寝ている時に死んじゃ
つたらしいの」

「ん?

「ちょ、ちょっと待て。え? 僕死んだの?」

「うん。原因もよく分からず」

しかも原因不明～!

つてか読めていたが、この後俺は異世界に転生されて、厄介事に巻
き込まれていくんだな。で、この転生の女神（自称）が俺の案内役
と。

はいはいテンプレ

「その通り! あなたはこれから異世界でセカンドライフを始めるの」
提案じやなくて決定事項かよ… つてか心を読むな。

「俺に拒否権は?」

「ない!」

「デスよね。」

「まあ、そのまま異世界つてのも可哀想だから何か願いを3つまで

叶えてあげるよ

テンプレキター！

「じゃ、今まま何も変えずにスタートして

「良いの？^{チー}反則的な能力も与えられるよ？」

「良いんだよ。俺にも色々あるからな…」

よし、いい感じでミステリアスな感じになりそうだ。

「なる程。元から身体能力が並外れてるのか～」

「俺のミステリアスを返せ～！！」

KY女神～！！もう流行つてない？さいですか。因みに俺は今リアル○ル^チになつていてる。

「な、何で落ち込んでるのかよく分からぬけど、『めんなさい』」「はあ…まあいいや。で、2つ田は異世界でもお前と話が出来るようにして」

異世界の知識なんて俺にはないからな。

「いいけど私も暇じゃないから何時でもつて訳にはいかないよ？」

「それでもいい。じゃ、3つ田は俺が行く世界の言語が話せるようにして」

「おつ！いい事に気付いたね～。あなたは^{チー}反則的な能力がないから言語も学ばなければいけないところだったんだよ～」

「だろうな。俺が元の世界で読んだ本（もちろんラノベですが何か？）にも似たような事が書いてあつたからな。

「じゃ、早速異世界へ…」

「ちょっと待つた

「何よ

決めゼリフを遮られてかなりご不満な様子。でもこれだけは聞いておきたい。

「まだ一切人物紹介をしてな…」

「メタ発言すなッ！次の話ですればいいでしょ～！」

次の話つて…お前もメタ発言してんじゃねえか。

「いいの…じゃ、気を取り直して～異世界へしゅつ…」

「出発～
・・・・してやつたり

1 なんか、死にました（後書き）

次回予告

潤「予定通り人物紹介をします。つてか絶対に俺の容姿とか分からぬもんね」

2 人物紹介（前書き）

2話目につづります

羽山 潤
はやま じゅん

我等が主人公の潤君。黒髪黒目、日本の平均的な身長にやや細身。容姿も中の上と、何処にでも居そうな高校生。身体能力はかなり良いらしいが如何に…ある1点において以外は優しい性格。異世界でどう生きていくのか乞うご期待。

転生の女神
てんせいのめがみ

主人公を異世界へと送る案内役。金髪灼眼、150cmを少し越えた身長と容姿は上の中とかなり良い顔立ちのよつで…身体の方はメリハリがほとんど無く今後に期待、は出来な…

バコーンッ!!

しばらくお待ちください

「え〜、作者が何者かに、ここ大事。何者かに襲撃されて星なつてしまつたので、私、転生の女神が代わりに紹介しま〜す。」

「何者かに、ねえ」

「何者かに、だよね〜潤君(ニコッ)」

「イ、イエス マム。何者かにであります!」

「よろしい。つと、話が逸れてきた。じゃ、人物紹介はこの位にして、潤君が飛ばされた異世界について軽く説明しちゃいま〜す」

「まあ、本編じゃまだ異世界に着いてないけどな…」

「細かい事はいいの!潤君が飛ばされた異世界『ウエドリア』は剣と魔法がメインの世界で〜す」

「物騒な世界だなあ」

「まあ、魔獣もいるしね」

「うわ～、やっぱ行きたいね～」

「そう言わずに、楽しい事も沢山あるからさ～逝つてきなよ」

「危ない世界なだけにシャレになつてね～！～」

「つと、また話が逸れちゃつた。潤君がどうでもいいこと言つから」

「どうでもいいことじやねえよ。リアルに死活問題だよ」

「ハイハイヨカツタネー」

「誰か助けて～！～」

「で、この世界にはお約束のギルドとか獣人がいる他に、古の神々の宮殿がどつかにあるらしいよ。私も一応神様だけど、そつちには居ないんであしからず」

「無視しやがつた。こいつ遂に俺の存在をスルーし始めた」

「あと、この世界には貴族も居るんでこの世界に行く人は要注意だね～。あ、そういえばこれからそこに逝こうとする人がいるんだよ～？笑つちゃうよね～」

「俺の扱いひでえ！しかもまた逝こうになつてるし…」

「じゃ、いよいよ本編ヘレッツゴー！」

「開始早々に逝かないようにするんでよろしくお願ひします」

2 人物紹介（後書き）

次回予告

潤「次からやつと異世界か。ん?なかなか危ない香りが…ってか人物紹介の時、俺らどこで喋つてたんだ?」

3 なんか、縁のものが…（前触れ）

やつと異世界に到着

3 なんか、縁のものが…

「何なのこのテンプレ展開
転生した瞬間、といつても床に穴が開くとかじゃなく、眠くなつて意識失つて目覚めたらここに居た。俺の目の前には体長2メートルを越そうかといつキツネ色の体毛を纏つた狼っぽい生物が3匹居た。

それもうキツネでいいんじゃね？

とか思つた奴、後で屋上来い。キツネは狼より愛くるしい顔してるよ。目を見る目を、丸いキューートな目とつり上がつた獲物を狙う目だよ？どつちがかわいいかなんて分かりきつてるじゃないか。同じネコ目イヌ科だとは思えないね！まあ、実際にキツネも狼も動物園でしか見たこと無いんだけども…やつ、俺とキツネとの出会いは小学3年生のとき遠足で…

「潤君。作者も読者の皆様も飽きてきてるよ。作者に至つては敵を狼からミドリムシにしようか悩み出したよ。」

「ミドリムシッ！？敵じゃねえじゃん！つてか戦闘に持ち込むほど作者に才能があるようには思えないよ

（ミドリムシが現れた）

「何かデカいミドリムシきたー！つてか変なテロップ流れたー！」
ミドリムシなんて教科書でしか見たことないからあればそういうのが分からぬけど！狼と同じ位の大きさの緑の物体に紐みたいなついてるぞ奴は。あれは教科書の写真と一致する（大きさ以外はな）。

「あ～あ、作者怒らしちゃった。じゃ、あとは頑張つてね～」

ＫＹ女神はそう言うと俺との交信を切つた。クソッ、自分だけ作
者の怒りから逃れやがった。

「はあ…しようがないからやりますか」

そう俺が言つと、今まで律儀に待つてくれていた狼が一斉に向か
つてきた。ミドリムシはその場で待機のようだ：

「戦闘描写とか作者は書けんのか、なつ！」

真つ正面から突つ込んできた狼その1を避けてすれ違いざまに狼
その1の首ら辺に肘で1発打ち込んだ。その1発で狼その1は気絶
をした。急所だからちょっとした力で気絶させられる。続いて狼そ
の2が、俺が1匹倒して油断している所を狙つたのか、後ろから飛
びかかってきた。

「俺の辞書に油断の2文字は、ないっ！」

振り返るような時間的余裕はないので、狼その2に回し蹴りを食
らわす。そうすると狼その2が5メートル位吹っ飛んでやつぱり気
絶。

狼その3は自分1匹だけじゃ倒せないと悟つたのか、逃亡した。
相手の実力を理解したのか。なかなか賢い狼だ。

「あとはコイツだけか…」

今まで空気となっていた、作者の嫌がらせの象徴であるミドリムシ
様が鞭毛運動をしている。

人類と単細胞生物の決戦が今始まる？

3 なんか、縁のものが…（後書き）

次回予告

潤「次回はいよいよヤツと戦闘だぜ！作者はまだまだ戦闘描写に慣れてなさそうだけど、頑張って書いてくれよ？」

4 なんか、力押しです（前書き）

前回に引き続き戦闘シーン

4 なんか、力押しです

「ミドリムシ」それは中央にピンクの細胞核や、一ヵロ一ヵロした鞭毛を持つコーグレナ目コーグレナ科の生物。ちなみにコーグレナとは美しい眼点という意味だ。

つまり、気持ち悪いという認識でOKという事。

そんな生物と俺は戦おうとしている。素手で。

・・・・手袋って、偉大だったんだな

「じゃ、気分は乗らないけどやりますか

俺がヤツに向かつて走り出すと、ヤツは鞭毛を俺に伸ばし始めた。「キモイっつーの」

俺は鞭毛を掴み取り引きちぎった。幸い鞭毛の感触はロープのそれと似ていたのでテンションが下がることはなかった。

ヤツは特に痛みを感じないのか、ちぎられて短くなつた鞭毛を再び俺に向けてきた。

いちいち引きちぎつてもきりがないので、鞭毛を避けつつ本体の核を壊しに向かつた。

と、そこで俺はある事を思い出し、足下にあつた石を拾つて鞭毛の届かない位置まで下がつた。

「あれが本当にミドリムシだとしたら

俺は石をヤツの核目掛けて投げる。

音速に迫る速さで。まあ、この事はそのままで話すとして…

ゴスツという音がして、核の少し手前で止まる。つてかアイツ硬すぎだろ。撃ち抜くつもりでやつたのに…

「Jの音? そりやあヤツが再生してる音に決まっているだろ。はあ…
「やつぱりな。ミドリムシって名前も動きも虫っぽいけど実は光合
成みたいな植物っぽい事もできるんだよな~」

正確には原生生物っていうて、動物でも植物でもない。中途半端
な奴め。

「せつかく頭使って倒そうと思つたけど、弱点も見いだせないし
手札も石と素手しかない。力押しでいきますか」「
という訳でここからは読者の皆さんには楽しくも何ともない戦い
が始まります。

まずは石を沢山拾う。相手がその場から殆ど動けないのが幸いだ
な。水の生物陸に揚げるからだ作者め。

それでもつて拾つた石を核に向かつて連射～
ズドドドドドと凄い音を出しながら石はヤツの核に向かつて飛
んでいく。寸分違わず同じ場所に。

そしてヤツの再生速度を超えた連射で遂に核を捉えた。

最後の一発として大きめの石をヤツの核に向かつて全力で投げつ
けた。すると核が壊れ、ヤツの身体は爆発するように飛散した。

最後の仕事として俺は飛んでくるヤツの残骸を避けて避けて避け
て…

つてな感じで人類と単細胞生物との決戦は人類の勝利で幕を閉じ
た。

4 なんか、力押しです（後書き）

次回予告

潤「やあ～、ヤツはとにかくキモかった。つてか光合成って再生関係なくね？まあ、いいや、次回は異世界で初めて人と会うぜ。第1異世界人がどんな奴なのか気になるな～」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（前書き）

人に、会いたいです。

5 なんか、作者に嫌われた気がします

無事作者の^{ミドリムシ}悪意を倒して、今は広い平原の中を移動中（ちなみに元の世界で死ぬ直前の服装は上下ともにジャージなのでパジャマで戦闘というシユールな画にはならなかった）。つてか広すぎじゃね！？周りに何もねえよ。KY女神は忙しいのか繋がらないし…こう何もないと方向が合つてんのかすら分かんね～よ。

（1時間後）

「まだかよ～そろそろ木の一本でも見えていい頃だろ～」

（2時間後）

「・・・・・」

（3時間後）

「作者アアアアアツ！～」りや何の嫌がらせだあ！さつきから石ころとか花の位置が何一つ変わってねえよ！風景のスペックが低いなんてレベルじやねえぞ！～」

（4時間後）

「作者さんよ～。このままだと予告で言つてた第1異世界人に会えずにこの話終わりそうだぞ～？」

ガタン

「ん？何の音だ？つて、やつと風景動いた～！うわ～、前に進めるつて素晴らしい！」

お～、森が見えてきた。何か達成感で涙が…

あ、そうそう、KY女神も居ないし1人で喋つても危ない人に

なっちやうから、こつからは心の中での咳きで。

森に入つてからは空も暗くなり始め、良さそうな場所（サバイバルの経験なんて無いのであくまでも良さそうな場所）も見つかって、今日は野宿することとなつた。食事はしょうがないから木に実つていた果実らしきもので済ませた。

・・・・・ そういえば今回つて人と会うんじゃなかつたっけ？まあ、思ったより進まなかつたから断念したのかな？

そんな事を考えながら俺は寝る準備をはじ…

ヒュンツ

何かが俺の耳元を過ぎていつた。ナイフだ。その時俺はこう思わざるを得なかつた。

人と会つてそういう事！？

確かに第1異世界人だけれども、確かに盗賊じゃないなんて言つてなかつたけれどもつ！

俺がそんな事を思つていると、森の中から2人の盗賊（仮）が姿を現した。

「よお、にいちゃん。こんな時間に森にいるたあ感心しないなあ」

と、盗賊1（仮）

「そうそ、俺たちみたいな奴に狙われるぜえ？」

と、盗賊2（仮）

「もしかしながら、あなたたちつて盗賊ですか？」

と、俺は盗賊（仮）に尋ねた。すると盗賊1（仮）は、

「ああ、そうだぜ？ さつきも街道を歩いてた新人っぽい冒険者を殺して金を奪つてきた。なあ、相棒？」

と下品なニヤツキを浮かべて隣をみた。しかしそこに盗賊2（断定）の姿はない。

「ああ、隣に居た人ならさつきあなたが『ああ、そうだぜ?』と言つた瞬間に殴り飛ばしたんで今頃はどつかの木にぶつかって氣絶中かと」

決して作者が戦闘描写が下手だから何時のためにか終わらせておこうなんて考えたわけじゃない。

「てめえ、よくもつ……」

盗賊1（断定）は顔を真っ赤にして懐から大振りのナイフを取りだした。ちなみに顔を真っ赤にしてつてのは恋する乙女的な感じじやなく、怒り心頭つて方の…え? 分かってる? さいですか。

顔を真っ赤にするつて言えばね~、俺が中学2年生の時に…

「死ねや!」

盗賊1（断定）が俺に向かつて手に持つているナイフを振り下ろしてきた。まだ話の途中なのに…毎に出会つた狼たちよりせつかちだな。しょうがない、サクッと終わらせますか。

「舐めた真似しやがつて」

再び俺にナイフが迫る。白刃の煌めきは今まさに俺の命を刈り取ろうと…やめたやめた。俺にこんな高度な思考なんて似合わないな。「そんなもん振り回して危ないですよ」と

そう言つて俺は振り下ろされたナイフを避け、盗賊1（断定）に足払いをして前向きに倒れさせようとする。案の定盗賊1（断定）は倒れ始め、俺は盗賊1（断定）の鳩尾田掛けて膝蹴りを食らわした。盗賊1（断定）は膝蹴りがクリーンヒットして肺の中の空気と共に血を吐いて気絶した。

「ふ~、終わつたな」

そう言つて俺は盗賊たちを放つておいて夜の森を後にした。眠気? 命のやりとりをした後にそんなもんありませんよ~。

「あ、どうせなら街道への出方聞いとくんだつた」

5 なんか、作者に嫌われた気がします（後書き）

次回予告

潤「最近後書き以外で名前が出てこない潤君です えへっと、次回はいよいよ街に入るのか？ってからくなもん食つてないんでマジで入れて下さい。あと作者、盗賊の表記がいちいち^懶陶しいんだけど。俺の扱いも酷いし…後で覚えてろよ～」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0239z/>

気まぐれセカンドライフ

2011年12月1日20時24分発行